

# メタル・ロック論

森本 ※※

※※ MORIMOTO

中京大学現代社会学部現代社会学科  
学籍番号 ※※※

## 1. はじめに：研究主題（私の関心）

私は、これから Heavy metal（いわゆる俗称のメタルと言われているもの）について論じていきたいと思う。世間では、メタルはただ激しいだけであるとか何を言っているのかわからないというイメージを持っている人が多い。近年では DMC（デトロイトメタルシティ）というデスメタルを題材した漫画のヒットにより、その漫画によるインパクトの強いイメージのすりこみにより人々の中にさらに汚いとか怖いというようなマイナスのイメージがメタルという音楽に付加されている。そういった現状がある中、私は、メタルという音楽がはたしてそんなイメージばかり持つような粗悪な音楽なのであろうかと疑問を持った。なぜなら、私のまわりにはメタルをこよなく愛している筋金入りのメタルファンやメタルを普通のポップ音楽やロック音楽といったジャンルのものと分け隔てなく聴くような人達がいたからだ。それに、私自身もメタル好きであるということもあり、メタルに対する世間でのイメージは本当に正しいとらえ方をしているのかというような疑問を抱くこととなった。

## 2. メタルの種類とその特徴

メタルは一言に言っても、プレイの仕方やその構成員やひいてはその思想にまでいたるところでメタルの種類が細分化されている。それでは、メタルにはどのようなものがあるのだろうか。主なメタルの種類としては「ヘヴィーメタル」「クラシックメタル」「スラッシュメタル」「ブラックメタル」「デスメタル」「ニューメタル」が挙げられる。これから、そのメタルそれぞれの特徴を紹介していきたいと思う。

まず、「ヘヴィーメタル」とは何かということ論じていこうと思う。1970年代～1980年代に現れたロックスタイルであり、ハードロックの延長線上に位置づけられるものである。ヘヴィーメタルは、ハードロックが限界を迎えたころに現れたパンクロックムーブメントの中で、若者が新たなハードロックの可能性を求めてそれを昇華させた物であるため、ハードロックとヘヴィーメタルの明確な境界線は存在していない。音楽的な特徴としては、ロックの構成と変わらないようなギター・ベース・ドラム・ヴォーカルというようなものとなっている。そして、多くの場合、重いディストーションをかけたギターとツェバスを用いている。ヘヴィーメタルでは、ギターソロが重視される場合が多く、特にギタリストが二人いる場合は、二人が交互にギターを弾くようなものもある。そして、ベースやドラムのソロもある、こういった傾向から歌より演奏で魅せようとする楽曲も多く存在する。

次に、イギリスの生きた伝説のバンドである「アイアン・メイデン」の属するジャンルである「クラシックメタル」について説明していきたいと思う。クラシックメタルとは、ヘヴィーメタルやハードロックの中でも1980年代初期から中期を総

合するジャンルのことである。これに分類されるのはアイアン・メイデンやジューダス・プリーストなどヘヴィメタルの確立に大きな役割を果たしたバンドである。後進のバンドに多大なる影響を与えたということから後からクラシックとして命名されたものである。このジャンルのバンドの影響力が強いために「**正当派メタル**」と俗称で呼ばれている。クラシックメタルはこれだという音楽性は存在しない。しかし、このジャンルの重要なコンセプトとしてジューダス・プリーストに代表されるような二人のリードギタリストを持つという特徴が挙げられる。**クラシックメタル**のアーティストは、クラシックロックやそれと同世代のバンド（ブラックサバス・レッドツェッペリン・ディープパープル）から大きな影響を受けている。また、1970年代後半におけるパンクロックにも影響を受けている。そして、**クラシックメタル**の歌詞のテーマはオカルト・愛・パーティーソング・ファンタジーといったもの（バンドによってテーマは違うが）が挙げられるという特徴を持っている。

「**スラッシュメタル**」とは、簡単に言ってしまうと従来のヘヴィメタルにハードコアの概念を掛けあわせスピードを重視したメタルのことである。それまでのハードロック、ヘヴィメタルといえばバンドの花形はリードギタリストであり、ギターソロの早引きこそ最大の見せ場であった。しかし、スラッシュメタルは速弾きこそあれど、楽曲の中心はギターリフであり、高速なもの、複雑なもの等さまざまなギターリフを開発していった。ただし、速さのみを追求していたわけではなく、スピード感を際立たせるため一曲の中、あるいはアルバムを通して緩急をつけるなどの工夫もされていた。とりわけ凶暴で粗野な印象が強調されがちなスラッシュメタルだが、メタリカのようにアコースティックを入れたり、バラード調の楽曲を入れるバンドもある。ヴォーカルに関しては、音程をあまり重視しない叫び声やハードコア風のがなり声のようなスタイルが多い。一方でハイトーンで伸びやかに歌い上げるヴォーカリストもいる。曲と同様に歌詞の進行も早く、ネイティブスピーカーでも聞き取れないほど早いことさえある。そして、スラッシュメタルの四天王と呼ばれるB I G 4（メガデス・スレイヤー・アンストラックス・メタリカ）は、多くのアーティストに影響を与えた。それは、日本のアーティストにも例外なく影響を与えており、日本の代表的なロックアーティストであるken yokoyama・9mm parabellum bulletなどの楽曲において演奏方法やヴォーカルの面で多くの影響を与えている。

「**ブラックメタル**」とは、速いテンポのドラムに、金切り声のようなヴォーカル、音を強めに歪ませたギターでのトレモロのピッキングなどを特徴とする。歌詞の内容には、サタニズム及び黒魔術への傾倒といった、反キリストを強く打ち出したものが多く含まれており、ブラックメタルバンドの中には、ペイガンリズムやナチズムを掲げるものも多く、ヴェノムが1982年に出したアルバム『BLACK METAL』がその起源だとされている。1980年代には、これらのサタニックなスラッシュメタルバンドが「ブラックメタル」と呼ばれることもあった。（また、現在でもオールドスクール・ブラックと呼ばれている。）続いて1990年代には、エンペラー、メイヘム、ダークスローン、パーズムといったノルウェー出身のバンドが活躍し始め、ブラックメタルという音楽を完成させた。長らく人の知るどころではなかったブラックメタルが俄に注目を浴び、その名が広まるに至ったのは、これらのバンドのメンバーを中心に結成されていた反キリスト教集団「インナーサークル」の存在が大きい。集団内の格付けは行った犯罪の大きさに決まったと言われ、彼らは教会への放火、十字架の破壊、殺人、窃盗、自殺などと数々の事件を起こした。アンダーグラウンド主義の元、メジャー音楽に攻撃をしかけるまでもなり、ツアー中のアーティストの家を放火・ツアーバスを転倒させる、等の行動も起こした彼らは、ブラックメタルマフィアとも呼ばれた。しかしパーズムの中心人物、カウント・グリシュナックことヴァーグ・ヴァイカーネスが、インナーサークル及びメイヘムのリーダーであったユーロニモスを殺害する事件を起こす。この事件でヴァイカーネスがついに逮捕され、懲役21年という判決を受けた事をきっかけに、インナーサークルの犯罪が次々と発覚して逮捕者が続出し、初期のブラックメタルシーンは崩壊してしまう。しかしながらブラックメタルは脈々と受け継がれ、現在ではノルウェーを中心とした本場スカンディナヴィア地方以外にも、フランスやウクライナをはじめとするヨーロッパ、南米、北米、東アジア、東南アジア、オーストラリアなど世界各地のアンダーグラウンドでシーンが築かれている。

「**デスメタル**」とは、ヘヴィメタルのジャンルの一種。現在は特定の音楽性を指した言葉として定着しているが、そもそもは死や死体、地獄などが歌詞のテーマとして多く出てくるスラッシュメタルバンドを形容した呼称であった。「アグレッシブでよりエクストリームなスラッシュメタル」と表現されることのある音楽を展開したバンド・デスが元祖デスメタルと呼ばれるのには、このような理由がある。ルーツとしては、スラッシュメタルと初期ブラックメタルから派生していると言われている。デスメタルの主な特徴として、ダウンチューニング施したギター・ベースを使用・半音階で構成された和音やコード進行を多様したり、展開形やテンションコードの前衛的な利用・複雑なリズム展開・高速のスラッシュビート・プラストビートなどの特殊なドラムパターンの使用・デスヴァイスの使用・歌詞のテーマが主に死、殺人、反宗教であるという特徴を持っている。

「ニューメタル」とは、1990年代中期に発生したグランジ・オルタネオティブロック・ヒップホップ・エレクトロ・ヘヴィメタルが融合したものである。これは、1990年代後半に最盛期であったオルタネイティブ・ロックの影響を受け発達し、その後最盛期を向かえたヒップホップに大きな影響を受けている。そして、ニューメタルの扱うテーマは、自己嫌悪・人生への葛藤・恋愛に対する苦しみを題材にしている。それ故に、曲が聴きやすく今までよりも幅広くの人々に広まった。しかし、賛否両論があり、前述のように多くの人々にメタルに対する門戸を開いたという意味では大きな意味を果たしたという見方が出来るが、ヒップホップやエレクトロを果たしてメタルに付加していいものかという意見もマリリン・マンソンなどによって指摘されている。

上記のような種類のものが、メタルの主な種類である。それぞれ、全く違った思想や演奏方法を持っている事がうかがい知れる。

### 3. メタルにおける日本でのステレオタイプ

これを踏まえた上で日本におけるメタルのイメージを考えていきたいと思う。日本におけるメタルの印象（聴こうともしてないのに）は、ただうるさいとかなんでも破壊するといったところである。これは、メタルの一部であるブラックメタルの印象や激しいリフだけを捉えただけのものに他ならないということが前章のメタルの種類解説において明らかである。確かに、メタルはある種のアンダーグラウンド的な一面を持っているということは疑いようもない事実である。しかしながら、このような印象がそのような一面だけで述べられているということは、考えにくい。では、どのようなものがこの悪い印象を多くの人に対して植え付けたのだろうか。それは、X JAPANや漫画「デトロイトメタルシティ」の影響が主な要因であるのではないかと考える。

まず、X JAPANの影響について述べていきたいと思う。X JAPANとは、日本で1989年にデビューし、1997年に一時解散し2007年に再度結成されたロックバンドのことである。ジャンルとしては、ヘヴィメタル・ハードロックとして一般的に認知されている。しかしながら、果たしてこの音楽のジャンルの区分がこのバンドに対してあっているものなのかという疑問が起こる。確かに、メタル・ハードロック感の強い楽曲が存在する。だが、彼らのそのビジュアルのことを考えるとそれはメタルというよりもビジュアルに近いと私は考える。なぜなら、彼らの身にまとっている衣装やメイクは、現在のビジュアルロックに近いものがあり、それ故に現代では、彼らがいなければ日本におけるビジュアルロックの反映はありえなかったというくらいにビジュアルロック界ではある種、開祖のような存在であるといわれている。また、ライブ中にパフォーマンスとして機材を破壊するという場面がしばしば見られるが、そういった行動が果たしてメタルな音楽性を象徴した行為かという事の対しても疑問が残る。なぜなら、メタルのライブに行ってもメタルのライブを映像で見てもメタルバンドで機材を破壊しているバンドはごく少数であり、ましてライブごとに機材を破壊するものなど決してありえないからである。このことから、彼らの行ったライブ中のパフォーマンスとしての機材の破壊は、メタルの音楽性を反映した行動というよりは、彼らの人間性においてなされるものであるのではないかと考える。メタル文化が希薄な日本で、メタルを正しく理解していないマスメディアによってX JAPANの存在がメタルであるというような間違った報道がなされ、機材を破壊するシーンをことさらに取り上げることにより、メタルとは派手な衣装を身にまとい、機材を惜しげもなく破壊するものだというようなステレオタイプが作り上げられたということがまず考えられる。

次に、漫画「デトロイト・メタル・シティ」がもたらしたメタルに対する影響について語ってきたいと思う。「デトロイト・メタルシティ」とは、2005年から2010年にかけてヤングアニマルにて連載されたギャグ漫画である。漫画の内容としては、ポップでオシャレな音楽を好む青年である主人公・根岸崇一が、大学進学に伴って上京し、ポップ歌手としてデビューするという夢を叶えるため、大学卒業後にレコード会社と契約する。しかし、その事務所では根岸が歌われることになったのは、彼の趣旨とは正反対のデスメタルであった。そして程なくして根岸は悪魔系デスメタルバンド「デトロイト・メタル・シティ」（通称DMC）のギターボーカル「ヨハネ・クラウザーII世」に仕立て上げられ、デビューする事になってしまう。メタルは嫌いな根岸だったが、いざ歌ってみると秘められたメタルの才能を発揮してたちまちバンドは大ブレイク、根岸自身の思いに反してクラウザーはカリスマと化し、DMCは一躍世間の注目を集める人気バンドとなっていくというようなものだ。

この漫画において、描かれているデスメタルの楽曲やライブ中の様子は、メタルとは程遠いものである。なぜなら、この漫画で描かれている楽曲では、粗暴な性的な描写を絶叫するような歌詞ばかりであるということと、劇中で描かれているライブの様子では、頻りに機材が破壊される様子が描かれているからだ。確かに、メタルの歴史をたどると機材の破壊や性的描写の絶叫などは存在した。しかしながら、それは現代のメタル状況においては正しくないといえる。いかにいっても、この漫画で描か

れているデスメタルは、前時代的なメタルの特徴の一部である破壊・性的描写という表現方法をより強く押し出し、ある種歪曲したものであるということである。それ故に、初期のデスメタルのファンからは、この漫画に対して否定的な考えを持つ者が多く存在する。

また、なぜこの漫画がメタルの現在の印象に影響を与えたかという点、一般人がメタルをするというような社会とのギャップが世間で受けて映画化までされてしまったからだ。さらに、この映画が公開されるにあたっての番宣において、従来のデスメタルの一部分にしかすぎない性描写・破壊というようなものを象徴するようなシーンが全国ネットの放送に上ってしまった事が現代のメタル日本における印象に大きな影響を与えてしまったということがいえる。

#### 4：まとめ

メタルには、多種多様なものが存在する。そして、それは、そのバンドや個人の持つ思想やそのバンドの誕生した音楽界の大きな流行に大きく左右され、その演奏方法の違いでも多くの種類に分類化されていく。そして、メタルのジャンルは細かいものまで含めると悠に30は超えてしまう。

また、現代の日本におけるメタルに対するマイナス部分の固定観念（ステレオタイプ）は、世界的な角度からメタルの歴史を眺めてみて生まれた物というよりかは、むしろ日本国内において生じた物であるということが言える。それは、前章で紹介したX JAPAN やデトロイト・メタル・シティにおける物が強く、メタルのある一部分のかなり目立つような部分だけを抜粋したものを全国ネットで多くの人々に発信してしまったということにある。すなわち、このメタルの日本での悪い印象は、マスメディアがそういった部分を大きく扱ったということが大きな要因であるということが言えるのではなかろうかと、私は思えてならない。